

社会保障論評24-005号 (作成日: 2024年4月15日)

「AIと私たち ベーシックインカム再考」 朝日新聞2024年3月16日付朝刊13面

- 「AI (人口知能) の進化で失業者が増えるとの見方もある中、安全網のあるべき姿とは」という命題で、「すべての人に一律に現金を配るベーシックインカム (B I) が再び注目されている」という点に関し、3人の識者が「耕論」で意見を戦わせているものである。
- 経済学者の山森亨氏は「すべての個人に無条件で、一般的に生活に必要とされる水準の所得を給付するのがB Iの構想」であるが、「新自由主義的な立場からB Iに似た所得保障を求めるもので、…市場への影響を最低限に抑える発想」の似て非なる議論もあると言う。
- 「世帯単位で支給するというものや、現行の給付の全廃や社会サービスの廃止・削減とセットになっている議論もあります。平等や自由を重視するB Iの理念とはかけ離れています。」とし、「児童手当や生活保護などをB Iの理念に近づけながら改善」が重要とする。
- 子ども食堂代表の荻野友香里氏は、「生活保護制度はあっても、必要な家庭に必ずしも届いてはいない。必死に働いても生活費が足りず、結果的に子が放置されている状況もある。『ベーシックインカム (B I) さえあれば』と思う時もあります。」としている。
- BIの理念に賛同する一方で、「問題は大きな賃金格差があることです。必死に働いても低賃金で、生活が追い詰められている人が多い。やりがい以前に生き延びるのに精いっぱいです。働けばきちんと暮らせるという姿を見せられる社会が、まずは必要」としている。
- 財政学者の井手英策氏は、B Iは財政面から実現不可能とし、「現金ではなく『現物』を支給するベーシックサービス (B S)」を主張し「社会保障や教育費を無償化する」としている。「経費ははるかに安くすみませす。…サービスは必要な人しか使わない」と言う。
- 井出氏の考え方は、『なぜベーシックサービスなのか』という論文にまとめられているが (https://www.yu-cho-f.jp/wp-content/uploads/2021summer_articles08.pdf)、山森氏は「サービスだけで生きることは難しく、現金給付と両方必要」という考え方を示している。
- 荻野氏と井出氏は「人間にしかできない介護サービスなどの仕事」や「AIによって新たに生まれる仕事」に言及し、過度の不安は不要としているが、AIによる生産性向上が「賃金格差」につながる点は認識しており、それぞれの立場で考え方や対応策を述べている。
- 人生を「幼・壮・老」の3つの時期に分けた場合、「幼」と「老」を自力で支えることはできない。どうしても、他者の助けを借りるしかないのである。そして、人間界全体で見れば、「壮」の時期の稼ぎの一部で、「幼」と「老」の時期の費用を賄う必要がある。
- さらに、ひとり一人の人間についてみれば、「壮」の時期の稼ぎがなかったり、乏しかったりする場合もある。その状態を、人間社会全体でカバーし、助け合おうとするのが、人類の知恵であり、相互扶助の考え方の下に、社会保障制度が発展してきた所以であろう。
- 「老」を支えるのが公的高齢年金である。少子化対策ではなく「幼」を支える仕組みと、「壮」で相互に助け合う仕組みが必要である。人類は、ようやくにして、「揺り籠から墓場まで」社会的に支え合う理想の入り口にたどり着こうとしていると思いたい。(以上)